

日本の質的心理学における『日誌研究会』の遺産

柴山 真琴 (鎌倉女子大学)

指定討論をさせていただきます、鎌倉女子大学の柴山です。今回、自主シンポジウム「日本の質的心理学の歴史をつくる一日誌研究会と質的研究の方法論」で指定討論者を務めさせて頂くにあたりまして、4人の先生方が日誌研究会時代に記録された日誌に基づいて書かれた著書あるいは論文を改めて読ませて頂きました。最初に拝読させて頂いたのは10年以上前になりますが、今回、読み直しをさせて頂いて、以前にも増して深く感動したと同時に、新たな発見があったことを最初に申し上げさせていただきます。

私は、質的研究法の中でもエスノグラフィーを研究手法にしておりますので、本日は、エスノグラファーの立場から考えたことを述べさせていただきますと思います。

1. 「日誌研究会」で提起された異議申し立て

私は、指定討論の準備をする過程で、当時の時代背景の中で日誌研究会が生まれたことの意味を考えてみました。日誌研究会が発足した1970年代後半という時代は、心理学実験や質問紙調査による量的研究が今よりもずっと大きな勢力で発達心理学の世界を支配していた時代だったと思います。そうした時代の中で、4人の先生方がなぜ日誌研究会を始められたのか、もっと積極的に言えば、日誌研究を自分の研究法の中核に据えることで、当時の発達研究に対してどのような異議申し立てをしていたのかということ考えたのです。

私は、4人の先生方には、次の2つの異議申し立てが分かれ持たれていたのではないかと拝察しております。1つは、「乳児を操作と分解の対象とし

て見るだけで、乳児の発達のプロセスを解明できるのか」という異議申し立て。もう1つは、「他者との交流から乳児を抜き取って、乳児が一人前になっていく過程を知ることができるのか」という異議申し立てではなかったかと。

まず1つ目の異議申し立てである「乳児を操作と分解の対象として見るだけで発達のプロセスを解明できるのか」について。これは乳児をどのような存在と見なすかという乳児観に関わるものですが、先生方の乳児観がよく現れているフレーズがありましたので、紹介させていただきます。やまだ先生は、ご著書『ことばの前のことば』の中で、「乳児は他者とコミュニケーションをすることそのものを喜びとする存在」（やまだ、1987, p.46）と書かれていますし、麻生先生はご著書『身ぶりからことばへ』の中で、乳児は「意味の充満した世界」を分かち合いたい相手（麻生、1992）とお書きになっています。この2箇所の記述に先生方の乳児観が端的に表現されているように、乳児は決して「操作と分解の対象」ではないと明確に否定されていらっしゃるごことがわかります。つまり「他者との関わりの中で生まれる乳児の自発的な行動を乳児が生きる生活世界の地平からじっくり見よう。そして、乳児の行動の意味を丁寧^{すく}に掬い取ることによって乳児の発達過程を理論化していこう」という研究姿勢をとることによって、刺激に対する乳児の反応や脱文脈化されて切り刻まれた乳児の行動を集めてその平均値を示す発達研究のあり方に異議申し立てをなさったのではないのでしょうか。

次に2つ目の異議申し立てである「他者との交流から乳児を抜き取って、乳児が一人前になっていく過程を知ることができるのか」について。これは、乳児は人々との交流の中で働きかけつつ働きかけられ、自ら理解しつつ理解されながら人として成長するのではないかという主張の表明と捉えることができるのではないのでしょうか。本日の先生方の話題提供の中にも、「関係」あるいは「文脈」という言葉が出ていたかと思います。さらに乳児が他者と交流するという場合、そこには「乳児とともに生きる人々との交流の中で乳児を見る」ということと「観察者との交流の中で乳児を見る」ということの2つの意味が込められているように思われます。4人の先生方は、観察をさ

れる中で、自分とお子さんとの関係のみならず、お子さんと配偶者との関係やそれ以外の家族との関係、例えば姉妹や祖父母との関係もつぶさに記録されています。そうした多様な関わりの中に身を置く乳児は、興味を持って自分から他者やモノに働きかけたり、他者から働きかけられたりしながら、複雑な行動を繰り返す行動の主体になっていくのですが、そうした行動が生み出される様相を行動の文脈もろともに鮮やかに描写することに力を注がれたのだと思います。

2. 日誌研究会の方法論的挑戦

さらにもう一步進めて、発達研究の方法論的挑戦という視点から、日誌研究会の取り組みを捉え直してみたいと思います。方法論的挑戦の1つとして、「乳児と観察者との関係」を重視し、その関係に立脚して発達研究をされていたのではないかということです。具体的に言えば、発達心理学者として乳児を見る一方で、乳児とともに生きる親として関わりながら見る—すなわち「発達心理学者としての見る力と聞く力を持って乳児を見つづも、乳児がうたえば応じるコミュニケーションの相手として関わる」—という観察のしかたこそ、4人の先生方に共通する観察法だったと思います。これはエスノグラフィーで言うところの「外部者の視点と内部者の視点を併せ持った第三の視点から複眼的に現象を観察する」ということに他なりません。4人の先生方はいずれもピアジェの行動観察研究の蓄積を踏まえて日誌研究をされてきましたが、ピアジェのように乳児に刺激を出してはそれに対する乳児の反応を調べる実験者としての役割で我が子でもある乳児に関わっていたのではないことに留意する必要があります。

外部者の視点である発達心理学者の視点と内部者の視点である親の視点とを重ねもつ複眼的視点により、4人の先生方はそれぞれ表1に整理したような理論的関心を紡ぎ出されて、その関心を核にしながらか観察をされていたものと思います。

もう一つの方法論的な挑戦として、「乳児の行動を肉眼的にとらえて書く方法」の意義を、日誌研究を通して提唱されたのではないかということです。

表1 4人の先生方の観察における理論的関心

観察者	観察における理論的関心
やまだ (1987)	言語機能の基礎となる行動の構造
麻生 (1992)	対象世界の共同化過程と、他者の身体と同型的な自己の身体の構成化過程
秦野 (1984; 1990)	自発的な語用論的否定行動の発達過程
綿巻 (1989; 1993)	一語期の語彙発達過程

具体的には、生活世界の中で他者と関わりを持ちながら繰り出される乳児の行動を、①それが生じた文脈や②他の行動、過去の行動と関係づけつつ、③乳児にとって意味のある行動を、④乳児の視点から理解して言語記録にすること、をすべて含むような観察と記録の方法です。乳児が発した発話を記録するという事態を例にとれば、その時にどんな動作や行動をしていて、他者とどんなやりとりをしていたのかなど、その発話が生まれた身体的・関係的な基盤や文脈をしっかりと書き込むこと(秦野, 1984; 麻生, 1992)、また、特定の発話が他の遊びや泣きとどのようにつながっているのかというように、乳児の特定の行動を他の行動や過去の行動と関係づけながら見る、つまり乳児の発話や行動の記録に時間を取り込むということです。さらに、観察する発話や行動が乳児にとっての意味のある発話や行動であること、「マンマ」という発話は日本語を母語とする乳児にとっては大変に重要な言葉と言えますが(綿巻, 1989)、乳児にとって意味のある行動を子どもの内側に位置して、できるだけ子ども自身の視点からその固有の世界に触れようとするということです。つまり〈身体・文脈・時間・意味・当事者の視点を凝縮させて織り込んだ言語記録〉の持つ価値を十二分に活かすことのできる質的研究法を構築されようとしていたのではないかと思います。

3. 引き継ぐ課題として

最後に日誌研究会の遺産を後輩の私たちが受け継ぐ際に確認させて頂きたい点を、2つの課題として述べさせて頂きたいと思います。

課題の1つは、日誌研究では「観察の焦点化をどのように進めていくのか」ということです。エスノグラフィー（特にマイクロ・エスノグラフィー）の場合は、図1のように最初は全体的・包括的に何でも見て、フィールドで何が起きているのか、何が重要な実践になっているのかなど、徐々に観察の焦点を絞り込みつつ精緻化させていきます。言い換えれば、エスノグラフィーでは、ある時点で全体的観察から焦点的観察へ、焦点的観察から選択的観察へと観察のしかたを移行させて、観察データを蓄積していきます（図2を参照）。日誌研究の場合は、どのようにして観察の焦点を決めていくのでしょうか。先程の先生方の話題提供の中で、多くの先生が自分の理論的関心に関係すると思われるテーマを複数持ちながら並行して観察していたと述べられました。日誌研究では観察の開始時点で観察の焦点をある程度決めておくのか、それとも観察をしながら徐々に焦点を絞っていき、観察の焦点化とデータが持つ理論的示唆の検討との往復運動をどのように進めていけばよいのかという点を確認させて頂ければと思います。

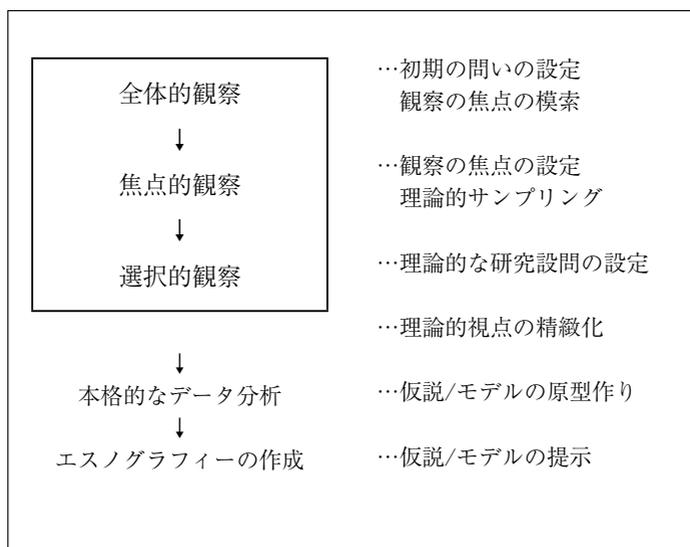
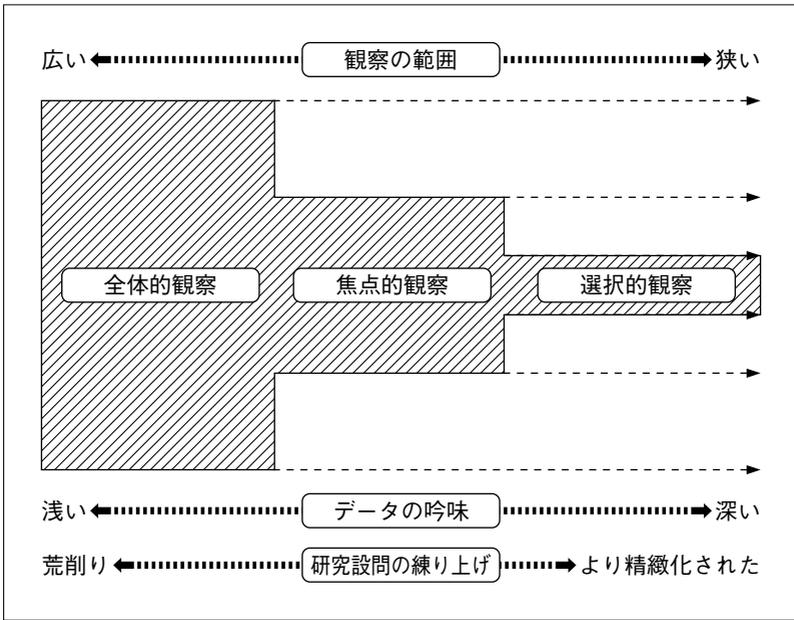


図1 エスノグラフィーにおける観察の過程と焦点化



(出典：柴山, 2006, p.51)

図2 エスノグラフィーにおける観察段階の移行と観察の範囲・データの吟味・研究設問との関係

もう1つの課題は、「完全な参加者として観察する場合の参加の多層性をどのように書き込むか」ということです。文化人類学者のスプラドレーは、フィールドへの参加の度合いという視点から、フィールドワーカーの立場を、①フィールドで正式な役割を持って観察する「完全な参加」、②正式ではないけれども何らかの役割を持って観察する「積極的な参加」、③積極的な参加と消極的な参加の間にある「中程度の参加」、④観察者役割が主体となる「消極的な参加」、⑤フィールドにまったく参加しない「参加せず」の5つのタイプに分けています (Spradley, 1980)。先生方の場合は、親という役割を持ってフィールドに参加されていたこととなりますが、先生方のご著書や論文を拝見しておりますと、完全な参加者として観察するという事は、単に親役割を持って参加観察をするだけでなく、乳児が生きる生活空間や社会的環

境の重要な構成者でもあるということが理解されます。ここの空間はどんなふうに向かうか、親が日常的にどのような行為を繰り返しているかということ自体が、子どもの行動環境になっていることがわかりました。例えば、やまだ先生はいつも2階からお子さんをおんぶして階段を下りることを習慣的行動として日々繰り返されていましたが、観察の対象とされていたゆう君の初めての指差しがちょうど階段を下りる最中に生じたということも、母親であるやまだ先生におんぶされて毎日必ず2階から1階に移動するという親のプラクティスがあったことと無関係ではないように感じました。

また、親役割を持ちながら子どもと関わりながら見るという場合のその関係の持ち方が、単に「見る一見られる」という二項対立的な関係ではなく、「共にいる関係」(やまだ, 1987, p.153)であることを実感しました。お子さんがわざと何回もモノを落としては親の反応を窺うといった事態でも、先生方は決して「親の権威への挑戦だ」とは捉えずに、それを子どものこだわりと見なして、むしろ楽しみ喜ぶという眼差しを向けられています。アメリカの親子関係の特徴と言われる「対立的関係」あるいは「命令者-服従者関係」を基本に置く親子関係とは違った、「包摂し合う関係」あるいは「通じ合う関係」を基本とする親子関係が土台にあること、しかもこれが4人の先生方の日誌研究に脈打つ通奏底音になっていることを感受しました。先生方のお子さんである乳児の自発的な行動や他者への働きかけは、自分が大好きな人(親)が興味を持って自分を見ていてくれる/自分のやることに応えてくれるという状況があったればこそ、生まれた行動なのかもしれません。

もしかすると、子どもを対象化・客体化して外側から客観的に観察するのではなく、子どもを観察の対象としながらも、身体的にも心理的にも交流しながら内側から子どもを捉えようとする関係の持ち方自体が、日本の子どもの育ちを捉えて深く理解するのに適した研究法—日本人研究者だからこそ編み出せる文化適切な研究法—と言えるのではないのでしょうか。

このように「完全な参与」と言っても、そこにはいくつかの参与の層があり、そこを深く書き込んでいくことが、乳児の自発的な行動が生まれる文脈のより深い理解になるのではないかと思います。完全な参与者であるからこ

そつかみ取れる「理論的な節目」(やまだ, 1987, p.V)をたぐり寄せることができるのも、こうした重層的な記述の蓄積があってこそ可能になるものと考えますと、観察データの記録のしかたを「記述の層」という観点からどのように精緻化していくかが今後の課題になるのではないかと思います。

〈引用文献〉

- ・麻生武 1992 身ぶりからことばへ—赤ちゃんにみる私たちの起源, 新曜社.
- ・秦野悦子 1984 前言語期から発話期における否定表現の展開, 教育心理学研究, 32 (3), 28-42.
- ・秦野悦子 1990 初期言語における否定表現の獲得, 日本語学, 9 (12), 45-56.
- ・柴山真琴 2006 子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで, 新曜社.
- ・Spradley, J. P., 1980, Participant Observation. Orlando: Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.
- ・綿卷徹 1989 初語「マンマ」の意味と意味作用, 発達, 38, 9-18.
- ・綿卷徹 1993 1歳から2歳までの言語獲得, 別冊 発達, 15, 147-157.
- ・やまだようこ 1987, ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち1, 新曜社.